

終える命

つなぐいのち

國森康弘

第1回

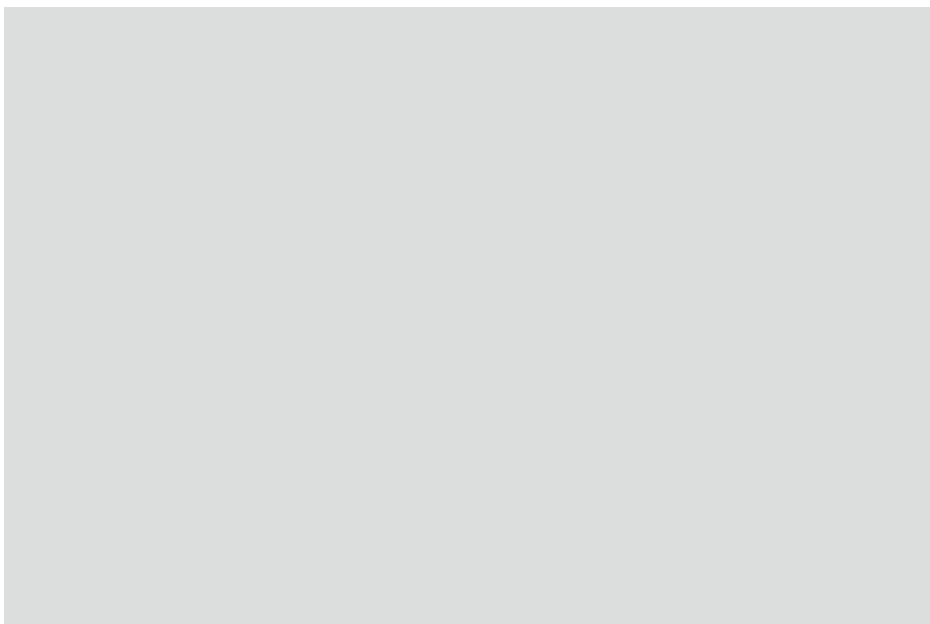
写し込みたい、
命のほとぼり

戦場でカメラをかまえていた僕が、
なぜ日本の在宅看取りを撮り始めたのか――。

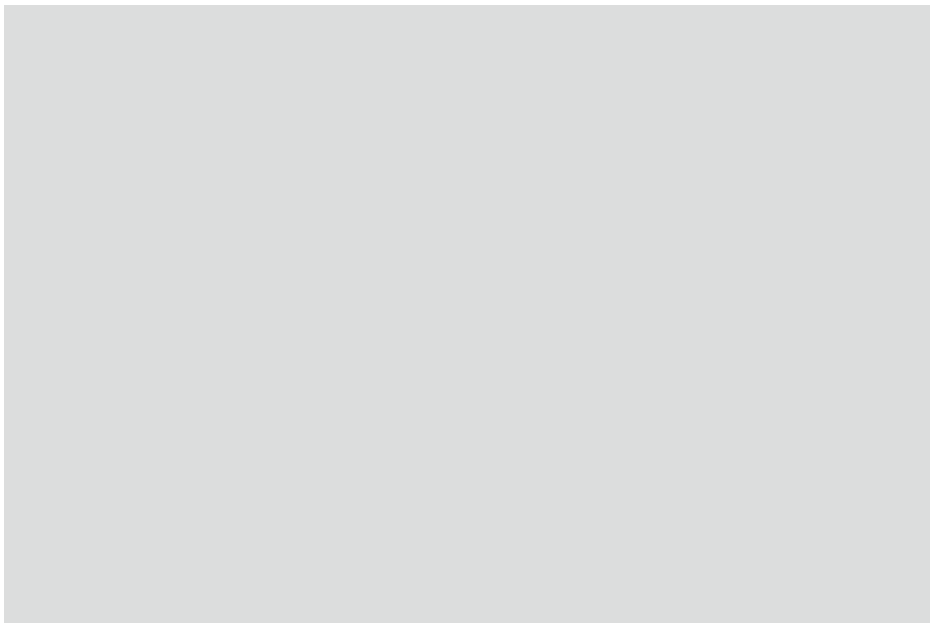
※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

内戦が数十年続き、失業率90%超。
生活のために銃を取る。—ソマリア・2003—

多くの市民が犠牲になった爆発現場。
集まった人々が「ノー・アメリカ」を連呼した。
—イラク・2004—



栄養失調で弱っていくカミースちゃん。
—スーダン・2005—



命

を授けてくれて、ありがとう。これからをもっと大事に、おかあさんの分も……、大切に生きます」

「お疲れ様でした。先に逝ったおじいさんと、仲良く見守っていてね」

別れと感謝の言葉を交わしながら、逝く人の旅立ちを見送る。

そんな看取りの場には、別れの寂しさ、悲しさ、つらさと同時に、どこかあたたかい空気が満ちている。充足感、時には高揚感。もつと言えば、生命力、命のほとばしりを感じることもある。涙のなかに、やさしい笑顔があった。

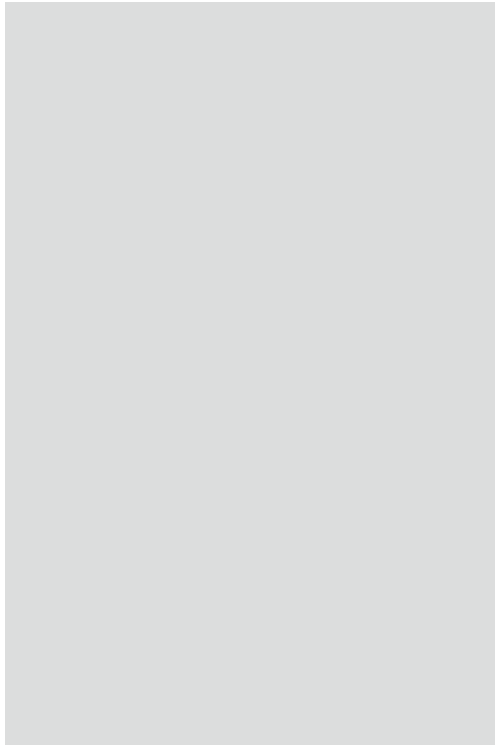
授かった命を生き切って、個として、あるいは総体として、次の世代に命のバトンを渡して、逝く――。

天寿まっとうとは、こういうことなのかもしれない。かつては、紛争地や経済貧困地域を取材していた。そこでは、子どもまでもが爆発に巻き込まれ、また飢えや病に侵され、死んでいった。人災による、いわば強制された死は、天寿まっとうではなかっただろう。残された家族の絶叫が、耳の奥でこだましている。

東日本大震災で地震につぶされ、大波にのまれ、火に焼かれた人々。カメラを向けることができなかった。

心は互いのそばにある。
――滋賀県・2012――

生き抜いてきたばあちゃん、の背中。―滋賀県・2010―



老若男女、一人ひとり名のある、家族がいる、2万人近い人々が命を失ったのは、天災なのか……。

毎年3万規模の人が自死に追い込まれている現状は、人災ではなからうか。年に20万を超える赤ちゃんが、中絶で生を閉じられてもいる。加えて、新型出生前診断の普及は、その数を少なからず増やすだろう。「確定診断」ではないうえに、誤診もあり得る。障がい者、患者、高齢者たちが「非生産的」として隅っこに追いやられ、「ケンジョー者」ばかりが胸を張る社会につながらないか。

どんなに重い障がいや病気を抱えても、あるいは年老いても、一人ひとりがかけがえのない存在であり、自分にしかできない自己表現と自己実現を重ねる者であり、それらそのものが「生産」であるのに。

天寿まっとうを知るために、日本の在宅看取りの現場に向かうようになった。

老いや病、障がいが高まるほどに、内に秘めたる生命力と表現力は高まっていく――。

それが、筆者がさまざまな出会いのなかで教わってきたことだ。撮らせていただいた写真一枚一枚に、その生き抜く力とほとばしりが写し込まれていればと、願っている。

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。